

Title	シンポジウム : Logic of Shadow (影の論理)
Sub Title	
Author	遠山, 公一(Toyama, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	活動報告書 Vol.1, (2007.) ,p.23- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20080300-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

9

シンポジウム

Logic of Shadow (影の論理)

開催日 2008年1月11日

企画班 脳と進化、哲学・文化人類学班

企画者 渡辺茂、遠山公一

講演者 Robert Casati (フランス国立科学センター)、友永雅己 (京都大学靈長類研究所)、小山慎一 (千葉大学)、渡辺茂、遠山公一 (塾内)

2008年1月11日北館ホールにて、「影の論理 (Logic of Shadow)」と題し、シンポジウムを開催した。発端は、フランス国立科学センターの主任研究員であるロベルト・カザーティ氏を招聘したことによる。同氏は、陰影に関わる研究を、哲学、認知心理学、および美術史など学際的な観点から多くの著作を発表しており、ネット上で陰影プロジェクトを展開している著名な研究者である。

シンポジウムは、オーガナイザーの一人でもある本塾渡辺茂教授の呼びかけに賛同して、陰影に関わる複数分野の研究者の発表を集め、極めて学際的な議論の場となった。前半は、千葉大学小山慎一助教が認知心理学の立場から、後頭葉腹側部損傷患者に生じた陰影認知の障害を人間の相貌認識の実験によって明らかにする発表、および京都大学靈長類研究所友永雅己准教授が靈長学の立場から、描かれた陰影をチンパンジーがどのように認識するのかを実験した比較発達学の成果を発表した。後半は、ルネサンス美術の専門である遠山と、本塾内藤正人准教授の共同発表とし

て、陰影が西洋で初めて組織的に描かれるようになるイタリア・ルネサンスと、その後の遠い余波として我が国の江戸時代の陰影表現を比較する試みが成された。最後にカザーティ氏による発表が行われ、イタリア14-15世紀絵画における陰影を、模倣の観点および観者の寛容さの視点から論じられたが、氏は認知と美術史、つまり見ることと描くこととの間にある齟齬について、臨機応変、かつ縦横に語られ、この学際的なシンポジウムを総合する役割を見事に演じてくださった。学際的な発表における専門用語などの違いなどの困難も予想されたが、活発な質疑応答も含め、陰影という人間の感覚にとって極めて本質的な事象と、その歴史的文化的意味についてのシンポジウムをすべて英語でもって滞りなく終えることが出来た。

(遠山公一)

